ひめゆり平和祈念資料館

資料館だより

目　次

●資料館トピックス・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
アニメ「ひめゆり」特集：アニメ「ひめゆり」インターネット公開　アニメ「ひめゆり」一般公開イベント「ひめゆりからの伝言」開催　アニメ「ひめゆり」に寄せる思い　アニメ「ひめゆり」の制作について　つくった人たちの思いがしっかりと伝わるアニメへ／証言員以外の生存者への聞き取り調査／伊原第一外科壕の発掘調査／糸満市平和の語り部育成事業・ガイド研修実施／夏休みイベント「元ひめゆり学徒の戦争体験講話」と「ひめゆりの映像上映と説明員トーク」を開催／「ウチナージュニアスタディー事業」平和学習を実施／教員向け講習会を開催／ 2013 年度学芸員実習／企画展「絵で見るひめゆりの証言」開催予定
●コラム　相思樹・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
●本棚（仲程昌徳）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
●研究ノート⑥「ひめゆり（姫百合）」の由来・・・・11
●仲宗根政善日記抄（48）・・・・・・・・・・・・・・・13
●資料館ガイド ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15

第52号
2013.11.30

資料館トピックス

◆特集：アニメ「ひめゆり」

昨年６月に完成し、資料館で上映しているアニメ「ひめゆり」の一般公開イベント「ひめゆりからの伝言」を今年７月に那覇市内で開催しました。さらに８月にはインターネットでの公開を始めました。この機会にアニメ「ひめゆり」を特集いたします。

アニメ「ひめゆり」に寄せる思い

館長　島袋淑子

昨年６月 18 日、アニメ「ひめゆり」の公開を前に、完成試写会が行われました。６年かかってようやく完成したことへのうれしさを胸に、証言員みんなで観ました。

最初の場面は、学校の隣を走っていた軽便鉄道です。懐かしい赤瓦の校舎、授業や寄宿舎の様子が描かれた場面に、楽しかった学校生活を思い出します。沖縄戦が激しくなり、米軍の攻撃で犠牲者が出た場面や、解散命令後、けがで動けなくなった友だちを残していかなければならなかった場面を観ていると、あの戦場の情景、一人ひとりの友の顔が目の前に浮かんできて、つらくなりました。でも次第に、ひめゆり学徒の戦争体験とみんなの思いをしっかりと表現したアニメ、私たちが待ち望んでいたアニメが完成したという満足感に包まれていきました。このアニメを多くの方に観ていただきたい、そして戦争の悲惨さと命の大切さを感じてもらいたい、それが私たちの願いです。

「事実に即してありのままに描いてほしい」という証言員の思いを大切にして、素晴らしい絵を描き上げてくださった海津研様、ナレーションの安里かれん様、挿入歌の合唱にご協力いただいた沖縄尚学高校合唱部とホワイトリリーの皆様、大藪祐歌様、静岡大学附属島田中学校の皆様、編集制作の中嶋正夫様に、心から感謝申し上げます。

最後に、やさしさと命を大事にする子どもたちが育ちますよう、戦争のない平和な時代が続きますよう祈っています。

アニメ完成試写会　2012 年６月 18 日

アニメ「ひめゆり」の制作について

海津　研

アニメ「ひめゆり」原画作者公募で選ばれた時、その舞台である沖縄本島には、八重山旅行への乗り継ぎで数回訪れたことがあるくらいでした。その時の印象に比べると、今自分の目の前に広がっている世界の豊かさに驚かされます。

沖縄への興味は、もともと生き物が好きだった事もあり、干潟のカニなど珍しい沖縄の生き物を見てみたいという気持ちでした。沖縄戦についての認識も、やはり広島・長崎の原爆投下などに比べると触れる機会が少なかったのか、大変悲惨な戦争体験があったことを意識できたのは、高校〜大学生くらいになってからではと思います。

そんな僕がこの公募に応募するきっかけとなったのは、全国で公開されたドキュメンタリー映画「ひめゆり」(柴田昌平監督）を見た事でした。その映画に宣伝コメントを寄せていたCoccoさんの歌も好きで良く聞いており、そのミニライブ付き上映会（2007年8月）で、初めてこの映画を見、ひめゆりの方々の戦争体験に映像を通じて直接触れた訳です。会場には島袋淑子さん、宮城喜久子さんもゲストとして来場されていました。それからしばらくして送られて来た映画のメーリングリストで、本公募の事を知りました。

ひめゆりの方たちの体験を伝える作品、というとやはり沖縄戦の中でも有名なもので、それだけに責任重大な印象がありました。沖縄の事をまだ良く知らない自分がそれに関われるという自信もありませんでした。それでも応募してみようと思ったのは、やはりひめゆりの皆さんの証言の映像を、非常に個人的な体験として受け取ったからなのだろうと思います。それに対して、何らかの自分の想いを送り返さなければ、と思わせるものがそこにはありました。

また、「自分などがそんな重大な問題を扱う作品に関われるのだろうか」と考えてしまう背景には、言い換えれば、戦争などという重大なできごとには、自分などという小さな存在が関わる資格はないのではないか、と責任を放棄してしまうことにもなるのでは、と思いました。そしてもし許されるならば、自分なりの方法と見方でこの作品に関わって行くことで、うわべだけではなくその体験を新たな所に伝えるものができるのではないか、と考えました。

そして幸運にも自分の描いた絵が選ばれ、作品に関わる事になりました。初めて、映画で見たひめゆり学徒隊の体験者の皆様にご挨拶し、戦跡などを見て廻りました。それからのことは本当に様々な出会いの連続でした。沖縄戦に関わる事だけでなく、沖縄の歴史から自然、また同世代の沖縄で暮らす人々など、様々な事を知ることが、この作品にとって重要と考えたので、資料館の方にはほんとうにわがままを言ったと思うのですが、たっぷりと時間をかけ、皆さんの体験に耳を傾けたり、沖縄戦のあった土地との対話をさせてもらいました。その中で、現代の沖縄の基地問題や、それに強く関心を持ち活動をされている方々とも知り合いました。

作品の製作中に東日本大震災を体験した事も、忘れられないできごとです。千葉県の自宅の被害は大きな揺れで物が落ちて来た位だったものの、同じ時代にこれだけ多くの方が一度に亡くなっていったことがまず衝撃であり、また原発の事故に関する世の中やメディアの動きは、かつて戦争へ向かっていったこの国の政治の動きや世相をあらためて未来への問題として、考え直させるものです。

ただ、そういった社会の動揺の中であったからこそ、この作品では最終的に皆さんひとりひとりの体験を大事にする、という初心に帰って、完成させる事ができたことが、良かったのではないかと思っています。それは僕という個人がここ数年、ひめゆりの皆さんひとりひとりの体験に耳を傾け、沖縄の土地を訪れながら体験してきたもので、そのような個人的な体験だけはどんなに時代が移っても変わらず、個人から個人へと伝わってゆくものだと思うからです。

つくった人たちの思いがしっかりと伝わるアニメへ

学芸課長　普天間朝佳

当館では、開館以来、証言員（ひめゆり学徒）の講話や館内説明、展示などを通して戦争体験を伝えてきました。しかし、小さな子どもたちに伝えるのは容易ではなく、その方法を探る中で、2006年に「ひめゆり」アニメ・プロジェクトが始まりました。

まずは当館の証言映像の制作をお願いした柴田昌平氏にアニメ制作に向けた調査を依頼しました。その後原画を描く人を公募してはどうかということになり、2008年1月～6月、アニメ原画作者の公募を行いました。その結果、18名および2団体から191点の作品を応募していただきました。その中から選ばれたのは、海津研氏と三田圭介氏のお二人でした。その後、アニメの他に絵本を制作することになり、三田氏には絵本の原画を描いてもらうことになりました。

原画作者を決定した後、内部で議論を重ねた結果、資料館の職員が制作進行を担当することになりました。原画を描くにあたって、海津氏にはとにかくひめゆり学徒の戦争体験を知ることから始めてもらいました。証言の本や映像だけでなく、証言員と職員が丸1日かけて戦跡を歩き、体験を聞き取っていく「証言員一人ひとりの戦跡めぐり」にも何度か同行してもらいました。ガマの岩肌の質感や、海岸のごつごつした感じなど、海津氏は現場を歩いて、絵のイメージを固めていきました。

2010年からは原画の仕上げ段階に入り、証言員と海津氏、担当職員とで1枚1枚の確認作業を行いました。証言員からは「換気をするために振ったのは上着ではなく防空頭巾だった」「手術の場面で、生徒が押さえている足の位置がおかしい」「解散命令後、壕を飛び出した後の絵には、もっと周りに人々の死体を描いてほしい」などの意見が出され、絵はそのたびに描き直され、塗り直されていきました。証言員の戦争体験を聞いてきた私たち職員が初めて知ったこともあり、体験の細部の記録化という点でとても貴重な機会となりました。

そして絵が完成する頃、中嶋正夫氏にディレクターをお願いし、絵をどのように動かすか、音楽やナレーションをどうするかといったことに取り組んでもらいました。通常のアニメ作品では、一人の主人公を置く方がわかりやすく、また感情移入がしやすいと言われていますが、ひめゆり学徒隊の全体像を伝えることが大事であるという理由から、あえて一人の主人公を置かない方針を採りました。絵をどのように動かすかについては、絵そのものに伝える力があるので、カメラワークで紙芝居のように見せることになりました。シナリオは海津氏の絵コンテを基に、証言員と中嶋氏、職員とで何回も確認しながら完成させました。

音楽は絵やストーリーにふさわしいという理由でチェロ曲に決まりました。また挿入曲には沖縄尚学高校合唱部とホワイトリリーのみなさん、大藪祐歌氏、静岡大学教育学部付属島田中学校のみなさんにご協力いただきました。ナレーターは当時高校生だった安里かれんさんにお願いしました。

このように、アニメ「ひめゆり」の制作は手探りで進み、途中、何度も課題に直面しましたが、多くの方のご尽力によって、2012年6月に完成しました。30分の作品の中に、証言員をはじめ、制作に関わった人たちの思いがこめられています。その思いが観る人にしっかりと伝わることを願っています。

証言員会　2012年3月28日

■アニメ「ひめゆり」インターネット公開

8月29日より、当財団が制作したアニメ「ひめゆり」(2012年・30分)をインターネットでご覧いただけるようになりました。http://youtu.be/eW9Ro2G_kUc　世界の方々に発信したいとの思いで、英字幕をつけました。アニメを通して、ひめゆり学徒の体験を知り、戦争がどんなにむごいものか、平和がどれほど大切なものかを考えるきっかけにしていただければと願っています。

■アニメ「ひめゆり」一般公開イベント「ひめゆりからの伝言」開催

7月24日、アニメ「ひめゆり」一般公開イベント「ひめゆりからの伝言」が、沖縄県立博物館・美術館講堂で開催されました。平日にも関わらず、200名の会場は満席となり、県内の高校生や親子連れの姿が目立ちました。第1部『絵本 ひめゆり』の朗読は、「ひめゆりと聞いて何を思い浮かべますか」「ひめゆり学徒を知っていますか」という街頭インタビューによって若者の声を取り入れるなど、プロのナレーターで構成される朗読の会、沖縄 Voice Labo.(諸見里杉子・大湾ひろこ・与那嶺ゆうか・久米あやの)が「つなぐ」をテーマに演出しました。第2部は、島袋淑子館長が元ひめゆり学徒として沖縄戦の体験を証言し、「人生は、つらいことや悲しいことがたくさんあるけど、生きる勇気をもってください」というメッセージを伝えました。第3部はアニメ「ひめゆり」を上映しました。最後に、ひめゆり平和祈念資料館で活動してきた証言員(元ひめゆり学徒)11人が舞台の前で紹介されました。ひめゆり平和祈念財団を代表して、本村ツル理事長が「私たちの思いをバトンとして多くの方につないでください」と締めくくりました。

沖縄 Voice Labo. による『絵本 ひめゆり』の朗読

島袋館長の証言

参加者に挨拶する本村理事長

証言員として活動してきた元ひめゆり学徒

◆証言員以外の生存者への聞き取り調査

４月から、当館で活動している証言員以外のひめゆり学徒生存者への聞き取りを行っています。資料館づくりの過程の中でも一度聞き取りを行っていますが、生存者たちが80歳半ばを過ぎた今、もう一度しっかり聞き取っておかなければならないことがあるのではないか、との理由から取り組みを始めました。

ひめゆり学徒としての戦争体験はもちろん、戦後抱き続けてきた心の傷やひめゆり資料館への思いなどを、気持ちを込めてお話し下さいました。今回の聞き取りによって新たに分かったこともいくつかあります。そして、みなさん一様に「どんなことがあっても戦争だけは二度と起こしてはならない」と、強くおっしゃっていました。

これらの聞き取りの記録は、ひめゆり学徒の戦争体験を多角的に記録することができるという点で重要なものになっています。

80歳を過ぎていることもあり、体調不良等の理由でお断りされた方もいらっしゃいますが、月に１～２人のペースで調査を行っています。証言員をリタイアされた方も含めて、10月までに14人の聞き取りを終えました。今後もできる限り続ける予定です。

北城良子さん(予科３年)の聞き取り

◆伊原第一外科壕の発掘調査

４月29日から５月11日まで、琉球大学考古学研究室との合同で、伊原第一外科壕の発掘調査を行いました。調査に当たって、壕の上部に伸びていた雑草や木の枝を切り落とし、戦後入り込んだ石を取り除きました。それによって、壕の全体が見渡せるようになりました。発掘溝を掘って、沖縄戦当時の地層を調べた結果、薬品のアンプルや人骨の一部がみつかりました。沖縄戦の米軍上陸より前に、人工的に石が積まれていたことも判明しました。

伊原第一外科壕

◆糸満市平和の語り部育成事業・ガイド研修実施

７月14日（日)、糸満市主催の語り部育成事業の研修生15人が、当館の展示室で説明を行う研修を実施しました。市内の小中学生を対象にした平和ガイド育成研修の一環で、沖縄戦を知るだけでなく、伝える方法を学びたいとの意向で、戦争体験がない当館の説明員が講師役となりました。

はじめに、説明員が展示ガイドツアーを行い、ガイド用の原稿を作成してもらい、実際にポイントガイドに挑戦してもらいました。ほとんど全員が初めてのガイドでしたが、身ぶり手ぶりを交え、積極的に語る様子に、聞き入る来館者の姿もみられました。研修生からは、伝えることの難しさを感じたのと同時に、

もっと学んで伝えられるようにしたい、といった感想が聞かれました。小中学生の意欲的な姿勢に、沖縄戦を伝える活動をともに行う若い世代の仲間が増えていくことに希望を感じることができました。

研修参加者

◆夏休みイベント「元ひめゆり学徒の戦争体験講話」と「ひめゆりの映像上映と説明員トーク」を開催

8月2日から8月11日（5日の講話は休会）の10日間、夏休みイベント「元ひめゆり学徒の戦争体験講話」と「ひめゆりの映像上映と説明員トーク」を開催しました。

一つ目の「戦争体験講話」は、通常、事前に予約していただいた学校団体などに行っていますが、ご家族連れなど個人での来館が多い夏休みにも講話を聞いていただこうと、2009年から開催しています。今年は、県外から来館した方々はもちろんのこと、「9月で館外講話が終了」という報道の影響か、沖縄県内からの参加者も例年より多くみられました。体験講話は9日間で681名の参加がありました。

参加者アンケートには、「数字やグラフではわからない「人の感情」が伝わって来た」、「書物で学んだつもりだったが、自分は何を学んできたのかと感じた」といった感想が寄せられ、「もっともっと体験者の話しが聞きたい」という要望がありました。

二つ目のイベントとして、講話終了後に、これまで当館が制作した映像3作品を日替わりで上映し、上映後に戦後世代の説明員による15分程度の解説を行う「ひめゆりの映像上映と説明員トーク」を初めて開催しました。こちらは10日間で638名の参加がありました。

ひめゆり学徒隊生存者の「戦後」を伝える映像を見て、「戦争が終わってからも友だちが死んだ悲しみや自分だけが生き残ったこと悲しみで今も苦しんでいることがわかった」という中学生の感想や、「説明員が話す姿に希望を感じる」といった感想がありました。夏休みイベント全体に対しては「(いろいろな試みで)戦争を知らせるという意味でとても良い企画だった」というううれしい声をお寄せいただきました。

元ひめゆり学徒の戦争体験講話

ひめゆりの映像上映と説明員トーク

◆「ウチナージュニアスタディー事業」平和学習を実施

8月8日、沖縄県知事公室交流推進課主催の「ウチナージュニアスタディー事業」の参加者30人が資料館を訪れ、平和学習を行いました。「ウチナージュニアスタディー事業」とは、沖縄からの海外移住者の子弟と県内の同年代の青少年が生活をともにしながら沖縄の歴史や文化を学び、交流を深めることにより、世界ウチナーネットワークを担う次世代を育成する事業です。海外からは、ブラジル、アルゼンチン、ペルー、ボリビア、アメリカ、カナダ、メキシコ、ニューカレドニアの8カ国の青年が参加しました。

参加者は展示見学後、アニメ「ひめゆり」(英字幕付き) 上映と説明員トークに参加し、その後、資料館で感じたことを共有し、「平和をつくるための方法」を話し合うワークショップを行いました。ブラジルやボリビアの若者たちから、「沖縄の伝統芸能や方言を学んでいるが、沖縄戦について学んだことはほとんどなかった。今回知ることができてよかった」という感想もありました。

グループの話し合いを全体に発表

◆教員向け講習会を開催

8月16日に「ひめゆり平和祈念資料館　教員向け講習会」を開催し、県内の中学・高等学校の先生方18人が参加しました。ひめゆり学徒隊と沖縄戦について学ぶとともに、資料館見学の事前・事後学習にワークショップを活用していただきたいと考え、企画しました。

生徒に興味を持って展示を見てもらうための事前学習、ひめゆり学徒の戦争体験講話（島袋淑子館長)、アニメ「ひめゆり」上映、資料館で感じた気持ちや伝えたいことを話し合う事後学習、参加者の意見交換などを行いました。

参加者からは「(講話を聞いて) 資料を見て学習するだけでは伝わらない感情なども伝わり、身につまされる思いがした」、「『知る』だけではなく『共感する』ことの大切さという新しい視点を得た」「一人で考え、感じるよりも多くのことに気づかされた。」などの感想をいただきました。全体を通して、参加者同士の学び合い、意見交換が活発に行われ、平和教育に取り組む先生方の交流の場としても意義のある一日になりました。

ワークショップの様子

◆ 2013年度学芸員実習

8月26日から9月6日まで、琉球大学の西銘研志郎さんが、学芸員資格取得のための博物館実習を行いました。実習生のレポートの一部をご紹介します。

高校生への「ひめゆり平和祈念資料館」のPRについて（抄録）

琉球大学４年　西銘研志郎

8月26日からの10日間のひめゆり平和祈念資料館での実習で、この資料館がどのように運営され、活動しているのか学ぶことが出来た。興味深かった点の1つに、入場者の客層というものがあった。ひめゆり平和祈念資料館に訪れる入場者のうち、団体を除いた高校生の割合は高くは無い。

資料館ではホームページを開設し、facebookやYouTubeといったSNS等も活用し、資料館の普及活動に力を入れていると聞く。特にfacebookやYouTubeといったものは高校生にもなじみ深いものであると思う。私はこうしたもの、つまり、生身の声を発信できるものをより積極的に活用することが出来ればいいのではないかと考える。

たとえば、入場券にfacebookの資料館公式アカウントのQRコードなどを印刷してみれば、facebookユーザーが見てくれるかもしれないし、「いいね」やコメントをしてくれるかもしれない。そうした入館者の発した情報が別な人の来館のきっかけとなることも大いにあり得るのではないだろうか。いうなればどれほど影響力のある口コミが作れるか、ということである。

高校生に資料館へ足を運んでもう、PR方法について考えてみたが、ここで強く思ったことは、身近な存在からのきっかけがつくれないか、ということである。この時期の生徒たちにとっては、毎日通う学校から情報提示があれば、興味をもつ機会が増えるのは間違いないことだと思うし、友人からの情報も非常に影響力があるものと感じる。こうして、周りからきっかけをつくっていくことが、一番の方法だと思うが、そのためには、資料館からの学校への働きかけが重要になってくると思うし、手間をかけさせずに、インターネットを用いての情報発信ができる環境をつくっていくことは意味があるのではないかと考えることが出来た。周囲の人からの影響で、この資料館を身近に感じてもらえることが出来ればいいと思う。

戦跡めぐりでひめゆり関連壕をまわる実習生

◆企画展「絵で見るひめゆりの証言」開催予定

12月16日から来年2014年3月31日まで、2013年度企画展「絵で見るひめゆりの証言」を第6展示室にて開催いたします。

当館では、これまでに絵本とアニメを制作しました。言葉では想像するのが難しいことも理解しやすくなったという感想をいただき、絵で表現する大切さを実感しました。その経験を生かして、このたび、資

料館で活動してきた証言員16人の体験をもとに、一人ひとりの絵を制作することになりました。そこで証言員が最も悩んだのは、戦場で友だちが亡くなったときの体験をどこまで絵にするかということでした。友だちの無惨な死のありさまを話すのはつらいけれど、話さなければ戦争の残酷さ、恐ろしさが忘れられてしまうのではないかと話し合った末、絵にして残していくことにしました。

絵の制作は、『絵本 ひめゆり』の三田圭介さん、アニメ「ひめゆり」の海津研さんにお願いしました。証言員（ひめゆり学徒）自身が特に印象に残っている場面を選び、職員が聞き取りを行って、お二人が下絵を描き、証言員に何度も確認してから完成させるという方法をとりました。

ひめゆり学徒の記憶に強く残っている場面を絵でご覧いただくことによって、戦争とはどういうものかを理解する糸口になることを願っています。

相思樹

『墓碑銘』に込めた思い

学芸員　前泊克美

当館の刊行物に『墓碑銘』という本があります。副題は「亡き師亡き友に捧ぐ」。沖縄戦で亡くなったひめゆり学徒と教師２２７人の顔写真、プロフィールやエピソード、死亡状況などがまとめられています。

資料館づくりの過程で「亡くなった人達の最後が全く分からない人が多い。その人たちの様子も一人ひとり調査したい」と意見が出たことをきっかけに、亡き学友の情報を集め始めたようです。当時でさえ沖縄戦からすでに40年が経過しており、２００人余の情報を集めるのは困難な作業だったようですが、生存者で構成された資料委員会メンバーが中心となり、同窓生らの協力を得てまとめあげました。

「テニス部で活躍していた」「ユーモアがあった」「読書が好きだった」…。亡き学友の短い生涯と死亡状況を書き記すことは、つらく悲しい作業だったことでしょう。生存者たちの「亡き友のせめてもの生きた証を残したい」という強い思いがあったからこそ成し遂げられたのだと思います。戦後68年経った今でも、証言員は、亡くなった友達のことを懐かしそうに話題にします。彼女たちにとって本当に身近な存在だったことに気づかされる瞬間です。

戦争によって断絶された亡き学徒の生と、その失われた生を記録した生存者。『墓碑銘』には、亡き学徒の死への悼みと、その残酷な事実から目をそらさず、伝え続けてきた生存者の思いが詰まっています。私たちに、静かに、深く、戦争がもたらした悲しみを訴え続けているのです。

本　棚

元琉球大学教授　仲程昌徳

琉球新報社会部編『未来に伝える沖縄戦』①②

沖縄戦を未来に伝えるための試みは、これまでもいろいろなかたちでなされてきた。学校における「特設授業」や体験者の出前講話などその中心をなすものだが、その試みを別のかたちで行ったのが本書である。

体験者が、中学生や高校生を対象にして語るというのは、なにも珍しいことではない。しかし、体験者が、学校を同じくする生徒二人だけを前にして語っていくというやりかたは、これまであまりなかったように思えるし、話を聞いた生徒が、その印象をそれぞれに記していくといったのもそうないことであった。

①②あわせて登場した話者は28名、その最初に登場した大城ウメ子さんの話は、「米軍による艦砲で母親を、日本兵によって祖母をなくし、その後、宜野座収容所の孤児院に兄弟と共に収容」されたという話であった。ウメ子さんの話を聞いた一人興南中三年生の大見謝望君は、「「伝える」私たちの責任」として「沖縄戦が起こったとき、ウメ子さんは11歳だったそうだ。今の自分より幼い時に体験した戦場の様子を聞き、想像するだけでも通常の精神状態ではなかったのだろうと思う。一番印象的だったのは、「当時は明日まで死なずに生きていられるかしか頭になかった」という言葉だ。罪のない子どもに恐怖しか与えない戦争の真実を、今後も聞き、そして伝えていくことが、戦争を知らない若い私たちの責任だと感じた」と記し、あと一人の聞き手で同じく興南中３年生の島袋海理君は「「学問は宝」忘れない」として「ウメ子さんのおばあさんが目の前で日本兵に銃で撃たれて死んだという話は、想像することさえも恐ろしい内容だった。その後、長女だったウメ子さんが必死で働いて妹や弟を育て、さらに自分の子どもたち全員を大学にまで通わせたという話には感動した。「学問は宝だよ」という言葉を僕たちは忘れてはいけない。自分が今平和な状況で、何不自由なく勉強できていることに感謝したい」と記していた。

ウメ子さんの話を聞いた二人は、同じく「想像」という言葉を用いてそれぞれの印象を述べるとともに、「伝えていくこと」「忘れてはいけない」との決意を表明していた。「未来に伝える沖縄戦」は、そのように体験者の話とともに、膝を接して聞いた生徒たちの手記を「聞いて学んだ」として掲載していた。「聞いて学んだ」の欄を読んでいくと、彼ら彼女たちが二人一組で直に体験者の話を聞くことで、これまでになく心打たれた様子が分かるものとなっている。

「未来に伝える沖縄戦」の試みは、「聞いて学んだ」の他に、「メモ」として、関係する出来事を説明していく欄を設け、理解を助ける工夫を凝らしているばかりでなく、漢字にはルビをふって、低学年の生徒たちにも読めるようなものにした点にも現れていた。

「未来に伝える沖縄戦」の中で語られていることの多くは、これまで刊行されてきた体験談とそう異なるものではないといっていい。その限りでいえば、新しい事実を掘り出したものだとはいえない。それはその目的が、新しい事実を発掘するといったことにあったのではなく、沖縄で地上戦があったことを中学生、高校生へ伝え、さらにそのあとの世代へつないでいくことを願って企画されたものであったことによっている。

沖縄戦をどう伝えていくか、今や、そのことが大問題なのである。「未来に伝える沖縄戦」に登場している話者の年齢を見ていくと、もっとも年齢の低い方で72歳（2011年当時）である。平均寿命が伸びているとはいえ、多くの体験者が、高齢になっていることは間違いない。中学生、高校生の手記の多くが、体験者から直に話が聞けたことを印象深いものと記し、そして、自分たちが、今後は、その話を伝えていく役割を果たしたいと語っているのには意を強くするものがあるが、体験者が語れなくなったあと、どうしていくか、ということは深刻な問題であるといっていいだろう。

「未来に伝える沖縄戦」は、どう沖縄の戦争を語り継いでいくかといった試みをして大きな成果をあげた一つだといっていいが、そのことであぶり出されてきたのが、ほかならぬ、体験者なきあとどうするかということだったのである。

ひめゆり研究ノート⑥

「ひめゆり(姫百合)」の由来

「ひめゆりの塔」「ひめゆり学徒隊」は沖縄戦で動員された女子学徒隊にまつわる呼称として知られているが、そもそも、「ひめゆり（姫百合)」という名称は何に由来するのか。改めて「ひめゆり(姫百合)」という言葉の誕生の経緯を紹介したい。

1．沖縄県女子師範学校と沖縄県立高等女学校の併置

当館のリーフレットでは、「ひめゆり」の由来を次のように紹介している。

『ひめゆり』は植物の花のひめゆりとは関係ありません。／沖縄県女子師範学校と沖縄県立第一高等女学校は、それぞれに校友会誌がありました。一高女は「乙姫」、師範は「白百合」と名づけられていました。／両校が併置されることによって、校友会誌もひとつになり、両方の名前の一部（「乙姫」の「姫」と「白百合」の百合）を合わせて『姫百合』となりました。／ひらがなで『ひめゆり』を使うようになったのは戦後です。（／は改行）

沖縄県女子師範学校（以下、女子師範）と沖縄県立高等女学校（以下、高等女学校）は1916（大正5）年に併置校となった。そのきっかけは、男子師範からの女子師範の独立だった。女子師範は男子師範学校内にあったが、年々入学生が増加し、2校で使用するには校舎が狭くなってきていた。そのため女子師範の1校独立が期待された。しかし、県の財政上の理由で一校独立が困難なため、高等女学校への併置案が持ち上がったのである。

1914（大正3）年10月28日付の「琉球新報」では「女師合併実施―女子師範学校と県立高等女学校との合併は既に実施することに決定し昨日予算の査定を終了」と報じられる。しかし、両校の併置は必ずしも歓迎されたわけではない。「沖縄毎日新聞」の同年11月22日付紙面において「…校長も女子師範を本務とし之れを標準とするとせば、勢女子師範は主となり、肝腎なる高等女学校は従になる恐れはなきか(中略)…高等女学校の独立と其抜本的改善を希望して止まざるものなり」との異論掲載を皮切りに、「沖縄毎日新聞」紙上で数回に渡り同様の論説が展開される。併置により女子師範が主になり、高等女学校が従になることで、教育の不利益が危惧されたようだ。だが、1915（大正4）年3月9日には女子師範学校設置及び高等女学校への併置が認可され、併置への動きが進んでいく。

2．校友会誌『おとひめ』と学友会誌『白百合』

高等女学校の校友会誌『おとひめ』は1907（明治40）年に、女子師範の学友会誌『白百合』は両校併置の6年後の1922（大正11）年に創刊された。1926（大正15）年発行の『おとひめ』19号、『白百合』5号を最後に、1927（昭和2）年に校友会誌『姫百合』として統合された。両校併置から実に11年の歳月が流れていた。

併置は校友会誌統合の遠因ではあるが、11年後の統合であることを考えると、直接の理由であるとは言い難い。校友会誌を統合した理由は何だったのだろうか。

ちなみに、「おとひめ」「白百合」という言葉は、1925（大正14）年に制定された校歌の一節にも使われている。

3．女師・高女の相克

1916（大正5）年1月12日、晴れて女子師範は高等女学校に合流する。しかし、設立・教育目的の異なる女子の学校がひとつになるのはそう簡単ではなかったようだ。『ひめゆり―女師・一高女沿革誌』には「女師・高女の相克」として次のように紹介されている。

（前略）女学校と校舎や運動場を共にすることは、環境の変化という以外に、将来目的の違う生徒達が同じ校内に一緒になることでもあり、始めの中はしっくり行かないところがあった。（中略）高女の生徒の

「イッターヤ、タダヌ女子師範、ワッターヤ高等女学校、ワッタードゥ上ヤサ。」

という、まるで笑い話みたいな幼稚な振舞いの言葉を聞くと、いい気持ちはしなかったのが事実だ。（「大正初期の女子師範生」 見里春『ひめゆり―女師・一高女沿革誌』P388-P389）

県立高女は一つしかなく、女の最高学府のつもりでいばっていたところへ、教員養成機関としてやはり格の高い女子師範と一緒にされたのだから、なにかにつけおもしろくない。名称が「沖縄県女子師範学校・沖縄県立高等女学校」。整列する時もあちらが先で、高女は後塵を拝することになる。いちいちカンにさわる。（金城芳子『なはをんな一代記』P139）

併置当初には、女子師範の生徒が安里の学校を飛び出して首里の男子師範学校に戻る「ストライキ事件」も起こったようだ。当時の蟹江虎五郎校長は、転勤の際に玄関脇にクロトンを２本植え「一本は女子師範、一本は高等女学校、二つ並んで仲好く成長せよ」と言葉を贈った。また、後任の楠品次校長は、1920（大正 9）年９月９日の９時に朝礼で「七つの誓」を両校生徒に宣誓させる。七つのうちひとつが「我が女師高女両校の生徒は今後一層相親和して一心同体の一団となり我が校の意を奉じ我校及び我等一団の名誉幸福の為に忠実を尽くす事に一致す」という一条であり、両校生徒を仲良くさせるための宣誓だった。

4．「姫百合（ひめゆり）」の誕生

1927（昭和 2）年、池上弘校長は、両校のより一層の親和と印刷経費削減を目的として校友会誌の統合を行い、校友会誌『姫百合』を創刊した。「姫百合（ひめゆり）」という言葉の誕生である。その後、同窓会や寮の名としても使われるようになり、２校を総称する言葉として浸透していく。女子師範と高等女学校の仲も、次第に姉妹校のように絆を深めていく。いつ頃からか、女師・高女[i]のあった那覇市安里付近では「姫百合橋」など女師・一高女[ii]にちなんだ名称も使われるようになった。

沖縄戦で女師・一高女在学の娘２人を亡くした金城和信氏は、終戦の翌年、1946（昭和 20）年４月に建立した女師・一高女の慰霊碑を「ひめゆりの塔」と名付けた。そして、女師・一高女の学徒隊は、戦後、「ひめゆり学徒隊（部隊）」と呼ばれるようになった。

今でこそ「沖縄戦の象徴」のような言葉となってしまった「姫百合（ひめゆり）」だが、本来は、沖縄の女子教育のさきがけである女師・高女の生徒たちの親和を目的として生み出された言葉であり、現在に至るまでの長きに渡って同窓生らに呼び親しまれている言葉なのである。

（学芸課　前泊克美）

『姫百合』第 11 号（1935 年発行）

〔参考文献〕
- 『ひめゆり―女師・一高女沿革誌―』（財団法人沖縄県女師・一高女同窓会，1987）
- 『姫百合のかをり』（姫百合會，1937）
- 『なはをんな一代記』（金城芳子，1977）
- 『沖縄県史　第 18 巻　資料編８　新聞集成（教育）』（琉球政府，1966）

i　女師・高女１　ii　女師・一高女：1928（昭和３年）に那覇市立高等女学校が県に移管され県立第二高等女学校となったのに伴い、県立高等女学校は県立第一高等女学校に改称。あわせて併置後の「女師・高女」という通称も「女師・一高女」となった。

仲宗根政善日記抄 (48)

〔1980年〕三月二十二日

三月二十五日の晩、南風原陸軍病院からトラックを出してもらった。前日とるものもとりあえず、病院勤務についたので、空襲がおさまったので、そのすきに生徒をひきつれて寄宿に荷物とりに来たのであった。生徒たちが寄宿舎へ行っている時、私はガランとなった校舎のかたかげから、淡い月影に照らされている付属校をじっとみつめていた。本校にも附属にも守る者は一人も残らず、戦火に放置されてあり、いつ灰燼に帰するかわからない。母校はやがて灰になるのだ。心字池の緋鯉だけが、まだ人の世の戦乱もしらずに、静かに泳いでいる。それもやがて焼け死ぬのだ。

アルバムをかかえて歩いていると、つぎつぎとありし日の母校の様子がうかんだ。

二十二日、今晩、宮城喜久子さんと新里久子さんに来てもらって、アルバムをくりながら、氏名のわからない写真を照合して行った。大方はわかったが、一人だけはどうしてもわからない。

いつ話していても、戦争の耳新しい話が出てくるが、今晩もまたそんな話を聞いた。

安里千江子〔と〕前川は、一日橋識名分室でガス弾でやられた。南風原病院移動の直前、識名分室から私のいる九号壕に連れられて来た。ガス弾でやられていたので、「先生、私すぐものを忘れてしまいますよ」ともらしていた。移動の当日は、親泊千代さんが、弾雨をくぐり、この生徒を引きとりに来てくれた。親泊さんの責任感の強いのに、感心もし、感謝もした。安里と前川は、あれからずっと親泊さんが、面倒をみてくれた。親泊さんと、奥里書記は、一部の一高女生を引率して避難の壕もなく、民家に岩かげにてんてんとしてさまよいあるいていたが、敵も次第にまじかにせまった頃、無理やりに伊原第一外科壕におしいった。ここでしばらく、津嘉山分室の一高女生といっしょになった。

宮城喜久子と安里千江子は、寄宿舎で同室だった。安里に私わかる？と訪ねたが、頭をふっていたという。壕の中にもぬかるみがあった。そこでどろんこになって来て、私龍宮に行って来たのとほほけて言っていたという。全く夢遊病者のようになり、それが日一日と高じつつあったという。

親泊さんに引率された一隊は、敵のせまった直前に、第三外科に移った。そうして、座波千代子、金城素子を除いて、安里千江子も、全員、ひめゆりの塔の壕で、最期をとげたのである。三学年で生き残ったのはいわゆるひめゆり部隊に参加した者では、金城素子・比嘉和子、比嘉初枝たった三名だったという。

比嘉初枝はもっとも幸運にめぐまれた。神の引き合せとしかいいようがない。

比嘉は上里海岸荒岬で自決した十一名とずっと行動をともにしていた。自決寸前に、比嘉は、全く偶然にも父親に行き逢ったのである。父が初枝をさがし求めていたのでもなかった。あの沖縄戦終焉のどたんばの戦場で、親が子をさがせる状況ではない。隣に伏せている者も、数分後には、どこへ姿を消した〔か〕わからない。そんな戦場で、比嘉初枝は父親にめぐり逢ったのである。親子がだき合って泣いているのを、お友達も皆もらい泣きしたという。あれほどもろく消えやすい人間の命が、こうして恵まれて、親子が生き残った例もある。生死は何によってわかたれるのか。沖縄戦の終末においこまれた者は、ほとんどが運命論者になる。人間のあさはかな知恵では、生死をおしはかることは不可能である。それだけに命の深さを感じさせられる。

三月二十四日

去る二十一日、ホワイトビーチに米原子力潜水艦「ロングビーチ」（一四、二〇〇トン）が接岸した。

モニタリング・ポストで採取した海水から晴天時の平均値九～一〇 cps を三～四 cps 上回る放射能が検出された。

沖縄に駐留する米第三海兵師団は、印度洋ペルシャ湾での有事に即応する緊急展開部隊として出撃態勢をとっている。

原子力潜水艦がホワイトビーチに自由に寄港するようになっておる。

政党・民主団体は政府・県に徹底的究明をせまりつつある。

終戦後三十四年もたった。二十余万の生霊の血

を流して、ブルーアイランドとして、世界に知られた島沖縄である。死屍累々とした戦跡に立って、この美しい青い空、青い海の上を、戦闘機の一機も飛ばすまい、この地を平和の原点としようと念じたのであった。

しかるに、戦争体験は風化し、平和憲法は改悪されようとし、自衛隊は増強されつつある。

八十年代が、誰も平和にむかって進みつつあるとは思っていない。

三十四年前の今日の日は、港川に艦砲の始まった日である。マスコミからもすっかり忘れ去られている。

朝早くおきて、すでに建物は焼失していた。二中の運動場に出ていた。暁の空に魔鳥のような敵機があらわれた。昨日と同じく、焦土と化した那覇市内には、ふりむく様子もなく、海に浮ぶ慶良間島へと飛んで行く。明日は、女子部一高女の卒業式だがと、気になりながら、家にひっかえし、仲里源盛君と、いっしょに、城岳の横腹に掘ってあった食料営団の壕に避難していた。

しばらくして、地軸をゆるがすような聞きなれない轟音がとどろいて来た。那覇署の警官が息せききって壕にかけこみ、港川に艦砲がはじまったと告げる。そのままじっと壕にいとどまっているわけには行かない。いよいよ上陸だ。来るべきものが来たのだ。壕を飛び出して女子部一高女へと急いだ。沖縄の悲劇　12頁―18頁

その晩、生徒を引率して、南風原陸軍病院へと立った。防空頭巾モンペに身をかため淡い月影に照らされ黒い隊列はしゅくしゅくとして識名の坂を登って行った。ふりかえると、昨日からさかんに集中爆撃を受けていた慶良間の島は海の彼方に沈んでいる。十十空襲で焦土と化した那覇市の残骸には、一燈のあかりもなく、沖縄全島は、戦いのはじまろうとする死のような静けさにつつまれていた。うらわかい乙女らを引きつれて戦場へ出る。これが現実なのだろうか。十十空襲のとき壕の中に妻子をのこして、学校へ出かけたことがうかんだ。学校へ行ってみると、校舎には、誰一人残らず、野田校長は雲雀が丘の上にある古墳の中に、御真影を奉安しておられた。墓の入口から、妻子を残して来た城岳の方をみつめていると、敵機が超低空して、爆弾をおとした。落下して行くのが二つ三つ四つとはっきり見える。地軸をゆるがすような音がつたわるようで、じっと眼をつぶってこらえた。那覇市はもうもうと燃え、紅蓮は終日つづき、夕やけ雲が空を蔽い、地も空も燃えに燃え立って、夜にいるにつれて、炎は、いっそう燃え立った。その中にもぐりこんで行って、妻子を家の壕にたずねたが、行方がわからなかった。やっと一週間もたってから、二つになる紀子を背負い五つになる民子を歩かせ、七つになる正子をつれて、国頭へ国頭へと流れていく避難民のむれにはいっていたことがわかった。戦争中、国頭の山中に避難して、ようやく命をとりとめてくれた。

黒い隊列をなし、識名の坂を大八車をひきながら〔ら〕のぼり、南風原陸軍病院の勤務についた。まるで生地獄のような病院壕の中で、精魂の限りを尽して、傷病兵のために働いてくれたのだが、彼らの多くは、沖縄最南端の岩かげに骨をうずめている。

そうして、わたしたちは汗と涙と血を流してえた体験をこの岩かげにうずめたくはないと岩肌に刻んだ。再び、戦あらしめてはならないと訴えたのである。彼らは永遠に黙した。しかし永遠に訴えつづけている。

この訴えは、広く日本国民はつたわらないのか。自衛隊は強化されつつあり、リムパック80(環太平洋合同演習)は、太平洋の真中で行われる。八十年代は、この乙女らの無言の訴えに耳をふさごうとしている。

ホワイトビーチには、原子力潜水艦が自由に出入りして、放射能をちらしつつある。昔から平和だったこの青い海は、再び戦闘の海とかわろうとしている。（続く）

※読みやすさを考慮して、字句を補った箇所がある。
旧字体は新字体へ変更し、明らかな誤字は改めた。
※〔　　〕は編集で補った。

資料館ガイド

◆平和講話・証言ビデオ「平和への祈り」視聴ご案内

多目的ホールでは、元ひめゆり学徒の講話（約 30 ～ 45 分）や証言ビデオ（25 分）、アニメ「ひめゆり」（30 分）を視聴することができます。※ご予約が必要です。（20 名以上の資料館見学団体対象）

【講　話】 10：00　11：00　12：00　13：00　14：00　15：00

【ビデオ】 9：10　10：00　11：00　12：00　13：00　14：00　15：00　16：00

※毎週月曜日・年末年始（12 月 30 日、31 日、1 月 1 日～ 3 日）・旧盆（旧暦 7 月 13 日～ 16 日）は講話は休みで、ビデオ視聴のみ受け付けます。慰霊祭前後（6 月 21 日～ 24 日）は、ビデオ上映会を行うため、予約はできません。

●最大収容人員：200 人（席）

●資料館へ入館していただく場合に限らせていただきます。

●ホールは講話･ビデオ以外の目的（セレモニー等）には利用できません。

●予約時間に遅れた場合、予約状況によってキャンセルさせていただくこともございます。

◆ＶＴＲ室のご利用について

下記についてビデオを視聴することができます。

◇「平和への祈り－ひめゆり学徒隊の証言」（25 分）

◇「仲宗根政善－浄魂を抱いた生涯」（30 分）

◇「ひめゆりの戦後」（33 分）

◇「戦火に消えた 21 の学園」（26 分）

◇アニメ「ひめゆり」（30 分）

多目的ホール

◆資料館ご利用案内

①入館受付　午前 9 時～午後 5 時（閉館は午後 5 時 25 分）

②休 館 日　年中無休

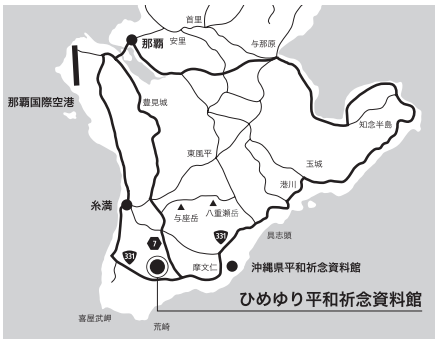
③入 館 料　大人￥300　高校生￥200　小・中学生￥100（団体 20 名以上　10% 引き）

④交　　通

【バス】旭橋・那覇バスターミナルから〔89〕で約 30 分、
糸満バスターミナルで〔82〕〔107〕〔108〕に乗り換え約 15 分、
ひめゆりの塔前下車

【モノレール・バス】モノレール那覇空港駅から赤嶺駅まで約 4 分、
赤嶺駅前（糸満・豊崎向け）バス停で〔89〕に乗車し、約 20 分。
糸満バスターミナルで〔82〕〔107〕〔108〕に乗り換え、約 15 分、
ひめゆりの塔前下車

【車】那覇空港より約 30 分



ひめゆり平和祈念資料館　資料館だより　第 52 号

2013(平成 25)年 11 月30日発行

編集・発行　公益財団法人　沖縄県女師・一高女ひめゆり平和祈念財団立　ひめゆり平和祈念資料館

資料館　〒 901-0344　沖縄県糸満市字伊原 671-1　☎ 098-997-2100

財団事務局　〒 902-0067　沖縄県那覇市安里 388-1　☎ 098-884-1115

URL　http://www.himeyuri.or.jp/